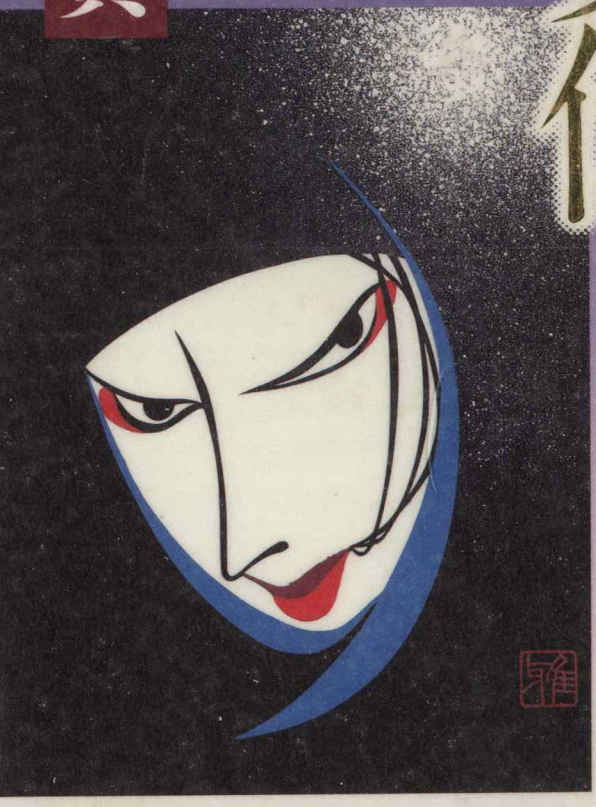
にっぽん妖女伝

早乙女貢



にっぽん妖女伝

早乙女貢

早乙女 貢（さおとめ・みつぐ）
一九二六年、中国（旧満洲）生まれ。
六九年『僑人の檻』で直木賞、八九年『会津士魂』（全十三巻）で吉川英治文学賞を受賞。『おけい』『沖田総司』等著書多数。日本ペンクラブ専務理事。

にっぽん妖女伝（ようじょでん）

一九九四年一二月二〇日　第一刷発行

著　者　早乙女（さおとめ）　貢（みつぐ）
発行者　若　菜　正
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
編集部（〇三）三二三〇―六一〇〇
電話　販売部（〇三）三二三〇―六三九三
制作部（〇三）三二三〇―六〇八〇
印刷所　凸版印刷（株）
製本所　（株）石毛製本所

検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1994 M. Saotome, Printed in Japan　ISBN4-08-774110-9　C0093

〔目　次〕

千姫地獄　五
恋標於伝幻燈　四九
火焔地獄お七譚　九一
怨雨喜遊女郎花　一三三
菱屋お梅寝乱刃　一七一
お百曼陀羅　一九一
絵島狂乱　二三五

装丁　安彦勝博
切絵　宮田雅之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にっぽん妖女伝

千姫地獄

一

人間の幸不幸は、何を基準とするのか定義はない。強いて言えば、その人が幸福と感じるか、不幸と感じるかの違いであろう。上を見ても下を見ても限度がないのが、人間の生活だ。

同じことでも、年齢の違いで、受けとり方が違ってくる。赤ん坊のときは、母の乳房を拒否されれば不幸だろうし、酒の味を識った者には禁酒は辛く悲しい。

お千の悩みは、そういう意味でも、贅沢といえた。

めぐまれ過ぎるほどめぐまれた生れのお千である。

もの心ついたときから、千姫のまわりには常に誰かがいた。独りということがなかった。寝ているときも、必ず、誰かがいた。たいていは、お付の女であり、その態度は慇懃で、歯がゆいくらいだった。

だから、もの心ついて以来、淋しいということがない。だが、冷たい風を知らなければ、温かすぎるのが、不満になる。

お千の顔を見ると、膝に抱きあげて眼を細める、肥った祖父が、従一位、内大臣徳川家康という天下人であることも知るはずがなく、父の秀忠が権大納言ということも、認識はなかった。

六歳の童女に、そういう認識があるはずもない。

この幸福すぎる境遇の中で、お千の不幸は四六時中、傍に人がいることであった。
洟が出れば、すぐに侍女が、揉み紙で拭いてくれ、下の用でも股のうしろから手を差しのべて拭いてくれる。小用を足したときも、尻を汚したときもそれは同じであった。
お千は、そのことに不自然も疑問も感じない。そう馴らされてきて、他を知らねばそれが常態と思うしかない。習慣的にそうなってはいたが、ただ、行為と感覚の間にギャップがあった。
侍女の奉仕は、お千の感覚までは察知しない。屏風を立てまわして、おまるへ腰をかけてする。侍女の一人が裾をまくってくれて、用の済むのを待つ。拭いてくれるのは、別の手である。よく拭ったあとで、広口の小壺から、香ノ水を綿に浸し、ぺちゃぺちゃと、その部分を洗うように、香浄めする。
厠で用を足したあとは、人間は誰でもそうするのかと思った。
が、侍女が下の厠へ入るのを見たとき、香ノ壺を持っていなかったので、
「小鈴、香ノ水はどうしたの」
と聞くと、その侍女はふっと顔を赤くした。
「わたくしどもには要りませぬ」
それから、
「お姫さまは特別でございます」
それがどういう意味かわからなかった。幼かったし、すべてをまわりでやって貰う身では、(なぜ?) という疑問はない。
その香ノ水が高価で貴重なものであることは、浄めの役の者がうかと落して割ってしまったと

き、
「男なら切腹ものじゃ」
と、古参の者に叱咤されて真っ蒼になったのでわかった。
もっとも、ものの価も銭というものもわからない身分では、一般の認識とは違ったものではあったが。
ともあれ、その香ノ水で、股間をぺちゃぺちゃと浄められ、あとを乾いた綿でそっとおさえて拭う。いい香りだし、悪い気持ではなかった。が、痒みをおぼえた。
お千は、
「かゆい……」
という。
「どこでございます」
「おまえが、かゆい」
「はい、かしこまりました。すぐに、よくなりましょう」
侍女はそっと、また乾いた綿で拭き撫でてくれる。
お千がいつかつい手を触れようとすると、
「おまえにさわってはなりませぬ」
と、止められたのだ。
なぜか。なぜだろう。
お千は手を触れてはいけないが、侍女ならいいのらしい。なぜという疑問よりも、そういうも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のだと思わせられている。
「かゆい」
と、言いさえすれば、そうして貰える。
その綿で拭き撫でて貰うと、その痒みはうすらぎ、いい気持になってくる。すると、その行為は終るのだ。
「もっと」
と、お千は促す。
ほかのことなら、どんなことでも、お千の希(のぞ)む通りにする侍女たちも、こればかりは、眉をひそめて、
「あまり、かようには」
と、逡巡(しゅんじゅん)する。
お千の望みが尋常ではないので、医者が呼ばれた。曲直瀬(まなせ)道三という当時天下一の名医だったが、お千は知らぬ。ただ、ひょろりと痩せた老人だとしか思っていない。
「――痒いと仰せられるのか、ほう、ほう、それはいけませぬな」
老医は、そこをのぞき、手を触れたそうにしていたが、診療ではあっても、高貴の肌に手を触れるわけにはいかない。
しきりに観察したのち、何かの薬液を調合してくれ、それを、侍女が新しい筆で塗布した。
すーっと爽やかになったのである。
それが薄荷(めぐさ)液だということは後に知った。

お千は、ときどき、
「痒い」
と言っては、侍女にそれをさせた。
だが、そのことで、一応の満足感は得られたが、やはり、その最中でも、自分の手でいじりたい衝動にかられるのだった。
「いけませぬ」
侍女の小鈴は、かぶりをふって、
「お姫さまは、下を弄うてはなりませぬ」
他の人のいないとき、小鈴は、筆や綿ではなく、おのれの口で、〝痒みを止めて〟くれることがあった。
それは、お千を満足させた。
小鈴はお千よりも五つ六つ年上で、侍女の中では一番若い。お千が幾つのときに奉公に上ったか、よくおぼえていないが、もの心つく、五つ六つのときからいた。
遊び相手といっては、身分が違いすぎるが、父母の配慮であろう。
お千の母は、信長の妹小谷ノ方たるお市の三女達子である。お江与ノ方として知られるが、秀忠はこの妻に頭が上らず、お手つきの女に子が出来たのも隠していたほどだ。
小鈴も、さいしょのうちは若かったから、侍女といっても、遊び相手の気持が出た。そんな感情は、しかし、まわりから強く止められた。
幼いころの、感情のゆき違いや、いさかいは、所詮、他愛もない。そんな戯れの中で、人間は

成長し、社会性を得てくるのだが、お千の周囲の者にしてみれば、社会性の認識も人間性の成長もない。
ただ、〝お姫さま〟として小過もあってはならない気持なのだ。
小鈴は旗本の娘だが、幼いながら、身分の意識はある。感情では、（妹のように可愛い）と、思いながら、侍女と姫君では距離を置かねばならなかった。
二人きりになることがあると、小鈴は、ふっと、遊び友達の気持が出る。
綿で拭いても、薄荷水を塗っても、満足しない女陰の痒みは、小鈴が、口で愛撫してやると、治まるのだった。
「いい……」
お千はにこりとする。
小鈴にとって、お千のそこは、あまりにも愛らしい、小さな丘と、ほそい溝と、泉を持った谷間だった。
用を足すごとに香ノ水で浄めるし、着物は下着といわず小袖といわず、上質の香を焚きしめているから、いつの間にか、お千の肌そのものが、香りに満ちていた。
小鈴は、お千の柔らかい肌の感触も好きだし、そこに唇をつけていると、彼女自身、肌が燃えてくるのだった。
そのまま、お千を抱きすくめたいような愛しさにかられる。
「もっとして」
と、お千は促す。

小鈴は、ただ唇で愛撫しているだけでは、ものたらなくなって、舐める。舌の先をちろりと出して、谷間をまさぐるのだった。
だが――
いつも運の悪いことに、そんなとき、衣ずれの音が聞えてくる。あわてて小鈴はその行為をやめねばならなかった。
「小鈴、もっとして」
お千は要求するのだが、
「またあとで」
裾を閉じてやりながら、
「夜になると、お花も寝みまする」
「お花……」
「お姫さまの花は、蜜がありまする。ほんによい匂い」
他の侍女が入ってきても、何の話をしているかわからない。
「お千の花は」
と、お千もそのたとえに満足している。
「何の花か」
「わかりませぬ」
首をかしげて、小鈴は言った。
「沈丁花か、金木犀か、甘い香りにございます」

「お千は沈丁花が好き」
「花の蜜は、蝶が好物、ほほほほ、小鈴は蝶になりましょうね」
花の蜜、たしかにそうだと、小鈴は思った。小鈴はまだ男を知らなかった。十三、四で嫁に行くのも珍しくない時代だし、もうその知識がある。
小鈴は十三歳になっていた。お千は七歳。そのお千のほうが、先に男を知ることになる。お千はすでに、輿入れの先がきまっていた。
数年前に薨去した豊太閤秀吉の、たった一人の子で秀忠と同じ権大納言の秀頼であった。

二

お輿入れ——嫁にゆく、といっても、七歳の子供には、それがどういうことか、理解はできない。特に深窓の育ちとなれば、尚更だった。
この春、祖父は右大臣に陞り征夷大将軍宣下あって幕府を開くことになった。むろん、右大臣も将軍も幕府も、お千には、わかりようはない。
ただ、伏見城内の喜びは大変なもので、誰もが、
「めでたい、お家は万々歳じゃ」
と、小躍りし、連日祝宴がつづいた。
お千も、だから、
「めでたい」

と、人々の口真似をした。祝宴の華やかな騒ぎも好きだった。お千は、めでたい、めでたいと、馬鹿のように言いつづけた。

そのお千と秀頼の婚儀がととのったのは、幕府創設の多岐にわたる仕事が一段落ついた五月の半ばだった。

もともと、この両家の婚姻は、秀吉の方から言いだしたことで、千姫が生れると間もなくであった。秀頼は四歳上だし、年のひらきも丁度いい。もっとも政略結婚では、こういう年恰好などは二ノ次三ノ次になる。

晩年の子ではあり、先に漸く出来た鶴松を夭折させただけに、秀吉は秀頼をいたく愛した。秀頼へ豊臣政権を譲り、その繁栄を希うことだけが、死期に近づいた秀吉のすべてだったから、五大老の中でも、もっとも強大で、狡猾な家康の牙をおさえるためにも、この婚儀は必要だった。

秀吉の死後、石田三成の挑戦による関ケ原の戦いの結果は周知の通りである。もはや、家康の一人舞台といってよかったが、かれは慎重だった。

千姫と秀頼の結婚の約束を反古にして、豊臣家を潰せば、三成が掲げた〝家康の野望〟を裏書きすることになる。名より実をとるのが、家康の巧妙さで、世間の反目を買わぬ方法であった。

そのためにも、この婚儀は成立させねばならなかった。

秀頼の母は、お市ノ方の長女お茶々である。淀に城を秀吉から貰って以来、〝淀どの〟と呼ばれていた。

秀吉の薨去後、秀頼の母として大坂城の女主人になったが、まだ陰では、〝淀君〟と、呼ぶ者が尠くなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com